

「春の
狂騒曲」

板谷 房

夜霧の都のパリにも、ようやく春がやって来た。だが春は、人の心を狂わすか……。

パリの町のふん囲気が人の心を乱すのか……。四人の警官がピストルで射殺されたのである。相手は：春の観光客と共にパリに入ってきたアルゼリアの独立党員たち。

で、パリの街は今至る所、武装警官が自動小銃を持って警備している。そして、まだアルゼリア独立党員たちは裏街にたむろして、良からぬ事をたくらんでいる。その取りしまりに毎日毎夜出動する警官たち……。

そこで……生命の危険を毎日街頭にさらしている警官た

ちが、危険手当なるものを、その筋のまたその筋になるだろうが、その、その筋に要求したら一日、二百円内外であった。

これでは少なすぎる命の代価だとはかり、警官たちがストをやった。徒党を組んで議会へ押しかけた。議会の門衛をなくった。事務官をつるし上げた。で、今度は国会の代議士たちが怒り出した。「国会を乱す者何者ぞ、内務大臣、責任を取れ」と。内務大臣は大統領の一言で、やっと首はつながったが、警視総監以下重職警官はずらり首。

……警官がストをやって、一体誰がパリ市民の治安を維持してくれるのか……。

とパリ雀がさわぎ出し、バスもメトロも一日ストをやり、そして街角には、あそこに三人ここに五人と機関銃を持った武装警官が立っている。

夜おそくモンバルナスのバアーから出て来たら、いきなり五、六人の警官に取り囲まれて尋問される。アルゼリアに似ているジャポネーは、センセン・キョウキョウなのだが……。

で、その春のパリのチマタはどうだろうか……。

そんな事、オレの知ったことか、と観光客めあてのキャバレーは、活気づき、カフェーはほくそ笑む。モンバルナ

春は人の心を狂わすのか……パリの街のふん囲気が人の心を乱すのか……。

(在パリ、画家)

スの安キャバレーでアヤシゲな踊りをやっていたブルターニューの家出娘が、いつのまにか一流劇場のステージに立っていたり、その出演料をこっそり横取りするジゴロ（ヒモ男）がこれ又、いつの間にか彼女にくっついていたり、富くじに三千万円当って死にたくないのが、一週間後に脳溢血でポックリあの世へ行くかと思えば、満八才の幼ない女の子が、子供を生んだり、そこでその春の狂騒曲の決定版はモンマルトルの丘へ行く。

モンマルトルのある劇場の「スリル競争」のよびものの広告にスペインから来た猛牛をおめにかける……とあったのを、その筋からと、カトリックの人道主義協会からの申し入れがあつて中止となった。

そこで劇場では、新しいよびものを考え出して、ポスターに次のように書き入れた。

「実際に牛を出す事は出来ませんが、闘牛士のマントの使い方だけは公開しますが、そこでもう一つ新しい妙技を加えまして、二台の自動車を時速百キロの速力で走らせ、操縦者に乗せたまま、正面衝突させるはずであります」と。

